

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	京都府
推進地域名	京都市

1. 事業推進の体制

- ・京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市認定食育指導員、上鳥羽農協、京都市西部農業振興センター、PTA、京都女子大学(食物栄養学科)の方々をメンバーとする上鳥羽小学校食育検討委員会を組織し、計画的に事業を実行した。
- ・校内に栄養教諭を中核とした食育プロジェクト(本校の食育の主題、取組の重点、食に関する指導の全体計画、学年の目当てと指導計画、研究組織等について検討・推進)を組織し公務分掌に位置付け、栄養教諭の指導・助言の他、本校食育推進主任等と共に教育計画を立案、検討し、食に関する様々な取組を通して家庭や地域との連携を図りながら食のもつ重要性についての認識を高め、児童と家庭における食生活の改善を目指した。

2. 事業内容

テーマ1	・体験活動を中心とした学ぶ喜びを味わえる学習活動の展開とその工夫・改善 ・規則正しい生活習慣を確立するための食習慣・運動習慣・学習習慣等の形成
<p>学校・家庭・地域が一体となった「学校を中心とした地域ぐるみの食育の推進」を図る研究・指導体制の確立・食育プロジェクトを設置し校務分掌に位置付け取組を進めた。</p> <ul style="list-style-type: none">・食に関する指導の全体計画、各学年の年間指導計画を作成し、教職員で共通理解を図り実践に取り組んだ。・食育検討委員会を開催し、学校運営協議会をはじめ、食に関わる各種団体等とも共通理解を図り、連携をとりながら食育の推進を図り取組を進めた。 <p>① 栄養教諭を中核とした取組の推進</p> <ul style="list-style-type: none">・栄養教諭が中心となって児童の生活実態や食実態を把握し調査研究を行った。(生活習慣アンケート・食に関するアンケートの実施)・栄養教諭と各学級担任とが連携し、子どもたち一人一人の食の実態を把握し課題解決に取り組んだ。また、どの教職員も他の学級の児童の課題を共有し、学校全体で課題解決を目指した。(アンケート結果の報告・共通理解等)・「食」に課題をもつ児童への個別指導では、家庭と担任・養護教諭や管理職とも連携をとり、具体的な取組を話し合いながら課題解決を図った。(給食時間の個別指導、保護者への働きかけ、児童本人への具体的な取組の指導など)・栄養教諭は地域や学校の取組を支援する団体等との連絡・調整を行い、食に関する指導等の具体的な関わり方についての助言を行った。・「ぱくぱくだより」(給食だより)の作成と配布。(毎月1回配布)・給食に関する児童の感想(「ふりかえりんご」)の掲示。・毎月20日を「食を考える日」と設定して児童・家庭への働きかけを実施。 <p>② 栽培活動を中心とした体験活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none">・上鳥羽農協や西部農業指導センターと連携した農育活動の推進。・自然体験活動の中の活動の工夫。(釜戸を使った自炊体験など) <p>③ 教科と関連させて体験したことを授業に生かす</p> <ul style="list-style-type: none">・1年 国語科の単元と生活科の単元を関連させ、農作物の栽培に生かせるように取り組んだ。また、実際の食材と出合わせるなどし、わかりやすい授業づくりに取り組んだ。 <p>(国語科…なぞなぞあそびをしよう・おおきなかぶ) (学級活動…いろいろなやさいのおうちをしよう・だいこんはかせになろう)</p> 	

- ・2年 生活科で栽培してきた野菜を収穫し、地域の方と一緒に調理して味わうことができるように計画し実践をした。また、表現力やコミュニケーション力を育み、より食物に対し興味関心を持つことができるよう、4つの味覚について知る授業を設けた。また国語科では、実物の食材と出会わせるなどし、わかりやすい授業づくりに取り組んだ。

(国語科…ふきのとう)

(生活科…ぐんぐんそだて みんなのやさい)

(学級活動…4つのあじをしろう)

- ・3年 総合的な学習として、京野菜を知り、そこから地域の産物「九条ねぎ」を栽培する活動を通して地域の農作物を知り、関心を持って学習に取り組むことができるよう計画し実践した。また、社会科とも関連させて、農作物を栽培する農家の人々など、はたらく人々にも感謝の気持ちを持つように取組を実践した。国語科での食に関する単元では、実物を用いながら文章と照らし合わせることで、児童にとってよく分かり楽しい授業が実践できた。

(総合的な学習…京やさいはかせになろう・九条ねぎを探る)

(社会科…京都市のまちの様子)

(理科…植物を育てよう)

(国語科…すがたを変える大豆)

- ・4年 総合的な学習として、地域で栽培されている水菜に着目し、栽培活動や調べ学習を通して意欲的に活動が進むよう計画をし実践した。収穫後の調理では、食物をより味わうことができるよう日常の食事と関連させてレシピを考えることができた。また、地域の方々に対する感謝の念も育むことができた。保健の学習では、健康に過ごすことを意識したときに、何でも食すことの大切さを考えることができた。

(総合的な学習…MI ZUNA～水菜～)

(保健…育ちゆくからだとわたし)

- ・5年 総合的な学習の中で、学校園でもち米の収穫と昔ながらの脱穀機を使った脱穀を実施した。また、収穫したもち米は学校・地域の方々や収穫祭で味わい喜びを分かち合った。後の家庭科の単元とも関連させ、児童が主体的においしく栄養バランスのとれた雑煮づくりに取り組むことができた。また社会科においても食と関連を持ち理解を深めることができた。

(総合的な学習…もち米を育てよう・上鳥羽雑煮をつくろう)

(社会科…わたしたちの生活と食料生産・これからの食糧生産とわたしたち)

(家庭科…おいしいね 毎日の食事)

- ・6年 家庭科と関連づけて、地域の産物「金時人参」を使った一食分の料理をつくることに取り組み地域の作物への理解と、生産に関わる人々や自然に感謝の念を持つことができた。

(家庭科…見直そう 毎日の食事・まかせてね 今日の食事)

(総合的な学習…金時人参のひみつを探ろう)

- ・各学年に応じて、社会科や生活・総合的な学習で、実際に農作物を栽培・出荷しておられる地域の方々に協力してもらい、土づくりから畝づくり、種まきと農業的な体験を通して単元のねらいに迫る授業を展開することができた。



テーマ2

・学校と家庭が連携した食に関する指導の充実をめざすための取組
・児童一人一人がよりよい食生活を送るための家庭の協力を促す効果的な方策に関する調査研究

- ① 食育に関する啓発の実施(参観・懇談・研究発表会・家庭教育学級等)
 - ・授業参観日には、全学年、食に関する指導の時間を設定し、学習内容を保護者にも理解していただき、児童の家庭での実践を支援していただくように計画し実施した。
また、学校歯科医や、料亭のご主人を講師にお迎えした家庭教育学級や給食試食会などを開催し、食育への認識を高めながら、学校の食に関する取組に理解と協力をはたらきかけていくことができた。
- ② 基本的な生活習慣確立に向けた取組の推進
 - ・全児童に生活アンケート調査を実施。
アンケート結果を食育プロジェクトで分析し、授業参観後の懇談会や学校便り等で「早寝・早起き・朝ごはん」をはじめ、基本的な生活習慣確立に関する児童の実態と課題解決に向けての取組の大切さについて説いた。保護者の認識の深化を図ることで支援と協力を求めることができた。
 - ・親子チャレンジ体験活動『野菜を使ったおやつ作り』の実施。
親子で協力して料理を作ることで、休日の団欒や共食のきっかけになるとともに、食事の内容についても栄養面等での理解を図った。
 - ・さわやか教室(健康教室)の実施。
栄養教諭や養護教諭と連携した個人懇談を行い、学校と家庭との連携を図った。
家庭の協力を得ながら、児童一人一人の健康管理に務め、児童一人一人の課題解決に取り組んだ。
 - ・朝食に関する意識を高める工夫。
長期休業中に「食」を主眼においた毎日の過ごし方(日課表)を作成した。
 - ・生徒指導部・人権教育部と連携しながら、毎日の生活点検を行い、基本的な生活習慣の定着を図ることができた。
- ③ 食に関するアンケート調査の実施
 - ・保護者を対象に食に関するアンケート調査を実施し、学校の食に関する指導や家庭での「食育」に対する意識について分析した。その結果には保護者への啓発等の資料としても活用することができた。



テーマ3

・食育に係わる地域素材の有効活用に向けた地域ぐるみの食育推進事業の取組
・学校の特徴(学校と地域及び大学、老舗の料理店等との連携)を生かした食育充実のための取組

- ① 地域の人材・食材・環境を生かした地域ぐるみの食育推進事業の実施
 - ・本学区の特徴である「京野菜の産地」を背景とした、環境を生かした取組。
京野菜についての知識を得るだけでなく、栽培されている農家の方の知恵や工夫、苦勞等について理解を深めることができた。講師として地域の農家の方をお迎えし、指導していただきながら、また知恵や工夫を教わりながら栽培活動をし、児童にとって充実した活動となった。さらに、農業未体験の教職員にも栽培活動における重要なポイントを教授していただくなど、児童だけでなく、教職員も食育の重要性を体感することができた。
また、栽培地には学校園のほか地域の畑も借りて、農家の方の仕事を体感することを通して感謝の気持ちを持つことができた。また、給食では京野菜に愛着をもち、進んで食べてみようとする態度が表れており、意欲の高まりを感じている。
 - ・児童自身が調理する活動を組み込む取組。
収穫した野菜は児童の発達段階を考慮しながら調理をすることができた。
低学年は、簡単な調理から、高学年は、家庭科での調理実習の体験を生かして調理をすることができた。児童自身の手作り料理を大事においしく食べることができていた。このような取組から家庭でも調理に関心を持って保護者と一緒に料理を作ったり、進んでお手伝いをするような児童がふえつつある。
京野菜に関して(1年…聖護院大根)(3年…九条ねぎ)(4年…水菜)(6年…金時人参)栽培体験(育成…夏野菜・冬野菜)(2年…夏野菜・さつま芋)(5年…もち米)



② 京都女子大学(食物栄養学科)や関係機関との連携の推進

- ・児童がもつ食に関する課題解決のために京都女子大学教授よりアドバイスをいただいたり、「食」に関する今日的課題や食育の進め方について講義を受けたりしながら教職員の資質向上を図ることができた。
- ・大学生の支援があり、各学年の取組が多様性をもち、児童にさまざまな体験活動に取り組むことができるようになった。また、人的支援があることで児童一人一人に指導が行き届き、取組がいつそう充実した。
- ・保幼小の連携として、保護者を対象とした講演会の開催。
日本料理アカデミーと連携をとり、日本料理の基本である出汁を味わったり、料亭の主人が客人をもてなす時に大切にしている「もてなしの心」など、相手を思う「食」について考えたり、保護者ととも家庭での「食育」について考える機会を設けることができた。
- ・児童や家庭の課題解決に向けた「朝ごはん100%」の取組の実施。
活動の支援を求めるために、地域の方々やPTAと連携して広報的な活動に取り組むことができた。

③ 豊かな食生活を送るための取組

- ・地域の茶道教授の方の協力を得て、児童が茶道体験を通して日本の伝統文化のよさを体感できるように取組んだ。(部活動や土曜学習)
- ・京都でつくられている様々なお茶を味わう「茶かぶき」の体験教室を行った。児童だけでなく、保護者も改めて自分たちの住む京都について愛着をもつきっかけとなった。また家庭では、時間のあるときにゆっくりとお茶を飲むという団欒の時間を持つきっかけとなっている。(親と子のチャレンジ体験教室)



テーマ1～3に共通する具体的計画

① 栄養教諭を中核とした食育の取組として

- ・上鳥羽スタンダード(指導計画)の中に、食育の授業を意図的、計画的に組み込んでいるが、毎年見直ししてその学年に適した目当てを設定し、全校で取組を積み重ねていくようにしている。
- ・毎年農育の「栽培ごよみ」を作成し、栽培活動に関する取組を教科・領域と関連づけ、取組で得た知識や経験等を活用した体験活動の拡充を図り、実践していく。
- ・栄養教諭が他の教職員の指導や食育推進のための取組でリーダー性を発揮できるように、全国大会レベルの食に関する研究大会や研修会に積極的に参加したり先進的な取組をしたりしている学校を訪問して、自身の資質や力量の向上を図っていく。そこで食育に関する実践報告や様々な情報等を教職員に伝達し、よりよい取り組みの方向性を見出し実践できるようにする。

② 食育についてのさらなる意識改革と実践力の向上を図るために

- ・教職員一人一人が、取組の中から見つけ出した課題を全教職員と共に要因の分析や課題解決の方向性を明確にし、自学年だけでなく他の学年学級に波及させ、次の取組に生かすようにする。
- ・教職員一人一人の食に関する資質向上を図るために、地域・家庭に向けて食育の重要性を認識していただくために意図的に体験的な活動等を含めた懇談や学習会を開催し、その場で自らの言葉で説明し本校の食育の取組について理解していただくようにしている。

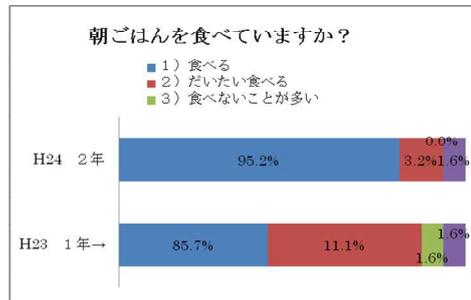
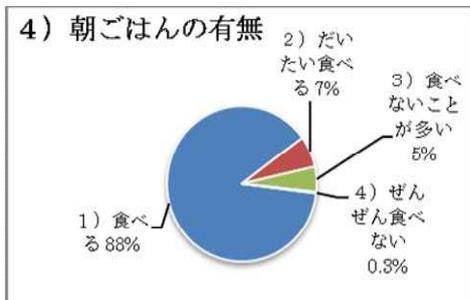
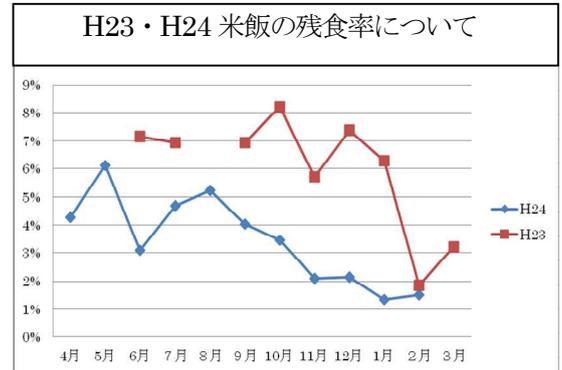
③ 児童のよりよい変容を目指すために

- ・指導前後の児童の「食」に関わる変容を学習カードや感想文、行動等から捉えて、担任はもちろんのこと、他の教職員にも情報伝達をしながら指導の成果と新たな課題について共通理解を図ると共に、一人一人の児童の課題解決に向けた授業構築や体験活動等の計画と実践を図るようにする。
- ・自分の健康を意識させるために、児童個人の健康カードや「自分のからだ」(広報紙)の活用を図るようになっている。
- ・児童が学習したことについて家庭でも実践しようとすることを保護者に伝え、家庭との連携を図りながら児童が家庭でもよりよい活動ができるように支援や協力を求めている。
- ・ランチルームが改修されたことにより、ランチルームの学習環境の充実が図られると共に、栄養教諭による指導もより充実が図られ、児童のランチルームでの栄養教諭の指導に期待を寄せたりみんなと一緒に食事ができる楽しさを強く感じている様子が見える。



本事業における評価指標と考察

朝ごはんを食べる児童の割合は95%で23年度と比較して上昇している学年もあったほか、米飯の残食率についても23年度から減少が見られるなど、数値的な改善が図られた。さらに児童の食への見方や考え方もよりよく変化し、また地域の方へのあいさつや会話が増えるなど、生活態度の改善にもつながっており、学校全体の雰囲気もさらに高まりを見せている。



また、児童はもちろんのこと、教職員一人一人の食育への意識改革が図られたとともに、学校・家庭・地域が連携した取組を進めることで、地域全体で学校の食育の活動を支援していこうという意識と合わせて、家庭・地域の方の食育への認識も向上するなど、まさに地域ぐるみの食育の形成が図られ、地域の活性化にもつながっている。

本事業の成果

・栄養教諭が中心となり、全教職員が全体計画や指導計画にのっとり様々な取組について児童にわかりやすく指導する仕組みづくりができた。これは系統的な指導を計画し、全教職員で共通理解をして実施できてきたことが大きい。

特に食に関する指導の中では、その指導目標を与えてきたことで、児童自ら偏食を改善しようという意識がみられるようになってきた。また、生産者への感謝の気持ちや生命の大切さを感じることができてきており、児童の「食」への見方や考え方、思いなどがより良く変容してきていると思われる。このことは、結果的に給食の残食率が昨年度と比較してぐんと減少していることや、年間を通して減少傾向になっていることに表れている。

・地域の方々、また関係団体の方々と連携をして取組むことにより、学校だけの知識的な学びではなく体験をもって充実した学びをすることができた。

・具体的には、食に関して関心がある児童が増えてきている。例えば前年度から実施している給食調理員との交流給食では、以前は学習の話題や遊びに関する話題が多かったが、今年度は当日の給食に関する話題や、調理・食品に関する話題が増えてきており、児童の食への意識の高まりを感じている。

・地域の方々と一緒に栽培活動に取り組んだことで、地域の方へのあいさつや会話をよくするようになり、よい校風が育ってきている。

・教職員の一人一人が食に関する取組の重要性を認識し、他教科でも活かそうと取り組む姿勢がみられるようになってきている。また、昨年度の実践を活かし、よりよい課題解決の方策を見出して実践化を図ることができてきた。

今後の課題(今回の事業を実施した結果、新たに見えた課題)

- ・ 食に関する指導を計画的に具体的に実践し、継続的に取り組んできたことで、児童自ら偏食を改善したり給食の残菜を少なくしたり農家や地域の方への感謝する気持ちや親しみ、生命の大切さ、さらには友達同士仲よくしたりしていくことの大切さなど、食に関する指導を通して児童により変容が見えるようになってきた。しかし、すべての児童とは言い難く、さらなる取り組みを通して変容を求めていかなければならない児童もいる。児童が児童に働きかけ、向上しようとする仕組みづくりも今後検討していきたい。また、高学年の児童には、実践力の向上を図るため、視察校での取組にあったように、地場産物を活用しつつ、自身の健康づくりや栄養バランスの面も考慮した献立を考え、自ら食事を用意する機会を設けることなども検討していきたい。
- ・ 新たな課題への対応については、教職員全員が課題解決に向けた方向性について共通理解を図るなどして、学校体制が整ってきたが、よりよい手立てを考え実践するためには、家庭との連携も必要であり、親の意識を変容させなければならない課題もあって、いわゆる生徒指導的な取組も必要となる。児童のよりよい変容に導いた取組や活動、地域の活性化等、さまざまな成果を各家庭にどれだけ深く取り込ませていくのか、その手段や方法について全教職員が考えていかなければならないテーマであると考え。単に広報的な活動だけでなく、教職員一人一人が保護者としっかり対峙して児童のよりよい生活習慣の確立や健康について取り組める体制の確立も必要である。